

<原著>

援助についての意識が心理的負債感に及ぼす影響 — 互惠性の役割に照準して —

竹内亜梨沙 信州大学大学院教育学研究科
水口 崇 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、心理的負債感の特徴、及びその個人特性を検討した。大学生 112 名を対象に、心理的負債感尺度、特性感謝尺度、援助成果志向性尺度、友人間ソーシャルサポート互惠性尺度、多次元的共感性尺度を用いた質問紙調査を実施した。結果、心理的負債感と特性感謝に正の相関があること、心理的負債感は援助成果志向性と友人間ソーシャルサポート互惠性の一部下位尺度と正の関連があることが明らかになった。これは心理的負債感が対人関係を促進することを示していた。さらに、日本人特有の感謝と負債感の関係性、及び互惠性について論じた。

キーワード：心理的負債感， 互惠性， 感謝感情と負債感情， 日本文化

問題と目的

私たちは日常さまざまな場面で誰かを助け、また助けられながら生きている。いわゆる「助け合いの精神」は、この社会で生きていくためにはとても重要なものである。援助に対する返報行動は、一般的には、自分が得られた利益に対する「感謝」や「喜び」といった気持ちを表すために行われると考えられている(西川, 1979)。ところが、援助を受けた際に生じるのは「感謝」や「誇り」といったポジティブな感情だけではなく、「相手に迷惑をかけて申し訳ない」という気持ちや、「心苦しき」のようなネガティブな感情も抱くということが明らかになっている。そしてこのようなネガティブ感情も、返報行動を動機づける要因であるとされる(松浦, 1992)。

援助を受けた際に生じる感情には「感謝」と「負債感」の 2 種類があるとされ、それぞれ特定の状況下で生じる感情と、個人差としての感情の感じやすさの 2 側面に分けて論じられることが多い。両感情をそのときの状況的側面から実験的に検討しようとするもの、特性的側面から質問紙調査を用いて検討しようとするものなど、研究の種類も様々である。

感謝と負債感

「感謝(gratitude)」は、明鏡国語辞典(第二版)では「自分に対する好意や親切をありがた

いと思うこと」と定義される。心理学の分野においては、「他者のおかげで望ましい状況の獲得もしくは悪い状況の回避がなされた」と認知することで生じる肯定的反応(吉野・相川, 2018)である「感謝感情」と、「個人が、ポジティブな経験や結果をもたらした他者の慈善に対し感謝の感情を抱いたり、気がついたりする一般的な傾向(McCullough, Emmons, & Tsang, 2002; 吉野・相川, 2020)」である「特性感謝」に分けて定義される。

「負債感(indebtedness)」は、返報行動が生じる理由を説明するために Greenberg(1980)が定義した概念である。Greenberg(1980)は、私たち人には「助けてくれた人を助けるべきである」「助けてくれた人を傷つけてはいけない」という2つの規範からなる「互惠規範(norm of reciprocity)」が存在すると主張した。そして「好意を与えてくれた他者にお返しをしなければならないという義務感」を「心理的負債(indebtedness)」と定義し、心理的負債は被援助者が援助によって得た利益に対する重みづけと、援助者が援助のために払ったコストに対する重みづけによって規定されるというモデルを作成した。このモデルによれば、自己への過大な利益を衡平状態に戻そうとするとときに生じるのが心理的負債であり、心理的負債を背負っているという不快な不衡平状態を、衡平状態に戻して解消しようとすることで、返報行動が動機づけられると考えられている。

相川・吉森(1995)は、同じように他者から援助を受けた状態でも、心理的負債の程度は人によって異なると考えた。例えば、少しの援助を受けただけでも自分に大きな借りがあると感じ、それを不快に感じて返報が促進される人もいれば、援助を受けても、それをそもそも借りだと思わない人もいる。また、自分に借りがある状態をそこまで不快に感じないため返報行動が動機づけられない人もいる。そこで、「他者から援助されることにより一種の負債を負った状態を経験し、それが不快感情の源泉になることで、他者に返礼するように義務付けられた心理状態」を「心理的負債感」と定義し、個人特性としての心理的負債感の感じやすさを測定する心理的負債感尺度を作成した。

心理的負債感の特性

近年、この感謝と負債感の関係について、研究によって両者の捉え方が異なることが指摘されている。例えば、Mathew & Shock(2013)は、感謝と負債感とは被援助時に生じる同レベルの感情で、相反して生じるものであるとし、特性感謝と特性負債感との間に負の相関関係があることを示した。それに対し吉野・相川(2020)は、感謝の下位概念として負債感が位置づけられ、感謝と負債感とは共起するという前提のもと、特性感謝と特性負債感には正の相関が見られることを示した。また、心理的負債は心理的苦痛や不安を伴うものであり、「相手と関わりたくない」といった回避の動機付けと関連があることが分かっている(Watkins, Scheer, Ovnicek & Kolts, 2006)。その一方で、心理的負債感が対人関係を促進する要因と関連があるという知見も存在する。例えば、「過去の援助成果に関わる援助経験を中心にして習得した、援助成果に対する志向性や態度、あるいは価値観(妹尾・高木, 2011)」である「援助成果志向性」や、「対人関係において、対人的な側面に反応する度合い(斎藤・

中村,1987)」である「対人的志向性」と心理的負債感には正の関連があることが明らかになっている(e.g., 鷺巣・内藤・原田, 2016)。

このような相違が生じる理由には、文化的要因が関与すると考えられている。例えば、一言・新谷・松見(2008)は、「何をもってお返しをしなければならないという義務感が生じるか」を理解するためには、文化的要因も考慮し、何をどのように重視し維持しようとしているかを明らかにすることが必要であると述べた。そして日米間比較を行い、日本人大学生はアメリカ人大学生に比べて、自己の利益よりも他者のコストに目が向きやすいことを明らかにした。また池田(2017)は、日本語の感謝表現の中に「すみません」という謝罪表現があることを指摘し、感謝に伴うすまなさ感情が対人関係の形成と維持に関わっている可能性を論じた。海外の研究において心理的負債感は「いかに自分の利益のために返報を行うか」を測定しているのに対し、日本では「いかに相手のことを思って返報を行うか」を測定する指標へと変化しているとの指摘もある(泉井・中澤, 2010)。心理的負債感は「お返しをしないで」というネガティブ感情であるが、自分を助けてくれた他者を慮ることで生じ、他者に返礼することを目的に、より他者と積極的に関わろうとすることで、対人関係を促進する要因にもなりうるのかもしれない。

心理的負債感と互惠性

ところで近年、心理的負債感が被災者支援や高齢者への介護場面に及ぼす影響が問題視されている。例えば、田中(2011)は、被災者との面接を行う中で「ありがたい」「申し訳ない」「どうお返ししてよいか分からない」といった言葉は必ず語られることを指摘している。そしてこうした心理的負債感が必要な援助要請を抑制し、災害時の支援活動を滞らせると述べている。「援助され続けると心が折れる」といった声も度々聞かれ、心理的負債感が自尊心と負の関連があることも明らかとなっている(相川・吉森, 1995)。妹尾・高木(2004)は、社会的支援の対象者として認知される高齢者もまた被援助時に負債感を経験することを指摘し、負債感を低減させる要因について検討することの必要性を説いている。被災地や介護場面で生じる負債感、は、衡平理論に基づけば、援助を受けて生じた利益とコストを返報できず、過剰に抱え続けている状態である。被災者や高齢者は、一方的な支援を受け続けることで決して望んでなかったわけではない「被援助者」としての役割を背負い続けることとなり、心理的負債感が増すのではないかと考えられている(石野, 2013)。

このような特定の援助場面に関する検討の中で、互惠性がもつ役割が注目されている。妹尾・高木(2004)は、高齢者の援助授与経験が心理・社会的幸福感・安寧感と結びつくことを明らかにし、援助をする・されるという好循環が精神的健康につながることを明らかにした。田中(2004)は、被災者支援活動において被災者の心理的負債感を低減させることを目指し、援助行動の結果として被援助者が得られた「援助効果」と、援助行動の結果として援助者が得られた「援助成果」を意識させるプログラムを考案した。被災者(母親と未就学児)と支援者(学生ボランティア)それぞれが活動から得たものに対して確認し合い、共

に評価し、感謝の気持ちを伝え合うというものである。この支援者と被災者の双方向のやりとりは、長期的で効果的な支援活動の可能性を高めたと述べている。また石野(2013)は、学生ボランティアは支援を受ける側にとって孫や兄弟のような身近な存在になり得るため、する・されるという役割に固定化されず変幻自在に役割を変え得るとし、双方向の関係が築けることの魅力を述べている。こうした他者との双方向のやりとりは「互惠性」と呼ばれる。「互惠性」は、「ある社会的関係性の中でお互いが他者の行為に対して何らかの形で報いること(瀧川, 2009)」と定義される、いわゆる“お互いさま”という感覚である。サポートの提供と受容が同程度あることは“互惠的”な状態(福岡・橋本, 1997)とされ、互惠的であることは心理的負債感を低減させるのかもしれない。

本研究の目的

以上のように、心理的負債感について矛盾する知見が得られており、その特性がはっきりとしない。心理的負債感とは他者との関わりを回避し、他者からの援助を抑制しようという知見もあれば、心理的負債感が対人関係を促進する要因になりうるという、正反対の知見が存在する。それが海外との文化差の影響であるのか、調査手続きの問題であるのかを明らかにする必要がある。また心理的負債の基礎となる互惠性の側面から近年の援助場面での知見を踏まえて検討することで、心理的負債感の特性をより深く理解することができるだろう。そこで本研究では、心理的負債感に関する先行研究の問題点を考慮した上で、改めてどのような個人特性と関連が見られるのか検討する。

第1に、特性感謝と心理的負債感の関連について検討する。特性感謝と心理的負債感に負の相関があるとした Mathew & Shock(2013)は国外の研究であるため日本の文化差を反映していない。対して特性感謝と心理的負債感に正の相関があるとした相川・吉野(2020)は、特性感謝を藤原・村上・西村・濱口・櫻井(2014)が作成した「対人的感謝尺度」を用いて測定しているが、これは児童用に作成されたものを大学生に援用している。特性感謝を測定する尺度については McCullough, Emmons & Tsang(2002)が作成した特性感謝尺度(GQ-6)があり、その日本語版は我が国の研究でも多く用いられている。先述の Mathew & Shock(2013)においても GQ-6 を用いて検討が行われている。両者の矛盾する結果が文化差におけるものであることを明らかにするには、GQ-6 を用いた検討が必要であると考えられる。以上より本研究では、「日本人の文化的背景を踏まえると心理的負債感と感謝が共起するため、両者に正の相関が見られる」という知見を、特性感謝尺度(GQ-6)を用いて再検討することを第1の目的とする。

第2に、心理的負債感と感謝は共起するという前提を踏まえた上で、心理的負債感が対人関係に関する個人特性とどのような関係にあるのか検討する。検討する個人特性として、「援助成果志向性」「共感性」「互惠性」の3つを挙げる。

援助成果志向性は、妹尾・高木(2011)が「過去の援助成果に関わる援助経験を中心にして習得した、援助成果に対する志向性や態度あるいは価値観」と定義した概念である。妹

尾・高木(2011)は心理的負債感と援助成果志向性には正の関連があることを明らかにしたが、これは高齢者を対象にした調査であり、一般化できる結果とは言い難い。高齢者は他者から援助を受ける機会が多いと考えられるため、心理的負債感を感じる機会が多いと予測される。そうした状況の要因が心理的負債感と援助成果志向性を結び付けたのか、それとも一般的に心理的負債感と援助成果志向性には関連が見られるのか。本研究では大学生を対象に、日常的な援助の相互作用場面においても心理的負債感と援助成果志向性には関連が見られるのか検討する。

共感性は「他者の心理状態に対する認知と情動の反応傾向(鈴木・木野, 2008)」であり、他者の心理状態を正確に理解できる認知的側面と、他者の心理状態に対する代理的な情動反応の2側面についての個人特性である。妹尾・高木(2011)は、心理的負債感が対人関係を促進しうる理由に、心理的負債感が“他者の心情を慮ることで生じること”を挙げているが、実際に両者の関連は検討されていない。感謝と負債感が共起するという前提に基づけば相手を慮る共感性があると「相手のために返報しなくてはならない」という意識である心理的負債感が高まると予想し、関連を検討する。

互恵性は Greenberg(1980)の互恵規範をもとにした考え方で、サポートの提供と受容が同程度あることを“互恵的”な状態とする(福岡・橋本, 1997)。被災者や高齢者に対する実証研究において互恵性が心理的負債感を低減させる可能性が指摘されているように、双方向の援助のやりとりが心理的負債感に負の影響を与えると予想される。田中(2004)が開発した負債感を低減させる取り組みは、あくまでプログラムという形での双方向なやりとりであった。本研究では日常的な双方向のやりとりを想定し、社会的支援の指標とされるソーシャルサポートとの関連を検討する。ソーシャルサポートとは、「他者との間の社会的支援関係(岡安・嶋田・坂野, 1993)」である。ソーシャルサポートの提供と受容が同程度である、すなわちソーシャルサポートが互恵的であると、ネガティブ感情やストレスが低減され、精神的・身体的健康度が高まることが明らかになっている(e.g., 岡安・嶋田・坂野, 1993)。ソーシャルサポートが互恵的であれば心理的負債感は意識されにくく、両者には負の関連があると予想し、関連を検討する。

方法

調査協力者

調査は、18歳から30歳までの大学生・大学院生を対象に実施した。男性32名(平均年齢20.97歳、標準偏差1.91)、女性80名(平均年齢21.73歳、標準偏差2.16)の、計112名(平均年齢21.51歳、標準偏差2.11)のデータを分析に用いた。

調査の手続き

Google formで質問紙を作成し、オンラインで配布した。縁故法と、甲信越地方の大学でオンライン講義後に配布した。倫理的配慮として、本調査は無記名式で行われデータは

統計的に処理されること、そのため個人が特定されることはないこと、本調査への参加は強制ではなく、回答の内容や参加の有無によって個人が不利益を被ることはないことを説明した。本調査への回答をもって調査への同意表明とみなされるものとした。

質問紙の構成

質問紙は、フェイスシート項目(性別、年齢)と、以下の尺度で構成した。はじめにフェイスシート項目を尋ね、その後、以下の順序で各尺度を提示した。

(1) **心理的負債感尺度** 相川・吉森(1995)が作成した、18項目からなる尺度である。1点(あてはまらない)から6点(あてはまる)の6件法で回答を求めた。

(2) **特性感謝尺度(GQ-6:The Gratitude Questionnaire Six-Item Form)** McCullough, Emmons & Tsang(2002)が作成した尺度の日本語版(相川・矢田・吉野, 2013)で、6項目からなる。1点(あてはまらない)から6点(あてはまる)の6件法で回答を求めた。

(3) **援助成果志向性尺度** 妹尾・高木(2011)によって作成された、18項目からなる尺度である。1点(あてはまらない)から5点(あてはまる)の5件法で回答を求めた。

(4) **友人間ソーシャルサポート互恵性尺度** 浅野・飯沼・大木(2016)が作成した、6項目からなる尺度である。特定の友人ではなく、日常場面における友人との関わり全般をどのように認知しているか測定することを目的に作成された尺度であったため、「あなたの友人関係についてお聞きします。日常の友人との場面を思い出し、もっとも当てはまるものにチェックしてください」と教示し回答を求めた。1点(あてはまらない)から5点(あてはまる)の5件法で回答を求めた。

(5) **多次元的共感性尺度(MES: Multidimensional Empathy Scale)** 鈴木・木野(2008)が作成した尺度から、『他者指向的反応』に関する5項目と、『視点取得』に関する5項目を使用した。いずれも1点(あてはまらない)から5点(あてはまる)の5件法で回答を求めた。

結果

因子分析による変数の抽出

(1) **心理的負債感尺度** 相川・吉森(1995)において1因子構造とされていたが、鷲巢・内藤・原田(2016)や泉井・中道・中澤(2007)はそれぞれ異なる2因子を抽出し分析に用いている。そこで本研究でも、以後の分析に用いる変数を抽出することを目的に探索的因子分析を行った。反転項目である項目3, 11, 15は得点の反転処理を行ってから分析に用いた。心理的負債感尺度の基本統計量を表1に示す。表1より、 $M+SD$ が評定値の上限である6を上回った項目2, 8, 17について検討を行った。各項目の得点分布と項目内容を考慮し、項目2, 17は天井効果が見られると考え今後の分析から除外した。項目8は除外せずに分析を進めた。

主成分分析によるスクリープロットは2因子解を示唆し、平行分析は3因子解を示唆した。相川・吉森(1995)は1因子解を適当としていたが、同尺度を用い研究を行った鷲巢・

表1 心理的負債感尺度の基本統計

項目	平均値	標準偏差	Min	Max	M-SD	M+SD
1 私は友達から世話になったら、友情を保つためにできるだけ早くそのお返しをする。	4.40	1.18	1	6	3.22	5.58
2 誰かが私の命を救ってくれるようなことがあれば、私は一生その人に恩を感じるだろう。	5.40	0.84	2	6	4.56	6.25
3* 私は誰かに借りがあっても、気にならない。	4.74	1.13	1	6	3.61	5.87
4 私は、自分から人に助けを求めるとその人に頭が上がらなくなると思う。	3.64	1.37	1	6	2.27	5.02
5 もし人から「あなたには貸しがある」と言われれば、私は決まりが悪くなる。	4.14	1.36	1	6	2.78	5.50
6 私は普通お返しができないと思うときは、その人の世話にはならない。	3.03	1.30	1	6	1.72	4.33
7 人におごってもらうと、次は私がおごらなければならないと思う。	4.63	1.18	1	6	3.46	5.81
8 人から借りていた物を返し忘れていたことに気づいたとき、私はあわてる。	5.08	1.05	2	6	4.03	6.13
9 わざわざ人が私を助けてくれた時には、その人に単なるお返し以上のことをしなければならぬと思う。	3.84	1.34	1	6	2.50	5.18
10 私は人に何かしてもらったら、その人にお返しをすべきだと思う。	4.86	1.06	1	6	3.80	5.91
11* 私は見知らぬ人から助けてもらった時には、お返しをする必要はないと思う。	4.32	1.04	1	6	3.28	5.36
12 なくした物を届けてもらったなら、私はその人にお返しをする。	4.15	1.07	1	6	3.08	5.22
13 私はたとえ嫌いな人にでもお返しをする。	4.13	1.24	1	6	2.89	5.36
14 私は人に何か物をもらうと、お返しのことが気になる。	3.58	1.49	1	6	2.09	5.07
15* 私は人から何かしてもらっても、必ずしもお返しをする必要はないと思う。	3.35	1.43	1	6	1.92	4.78
16 私は人に何かをしてもらうより、自分が何かをしてあげの方が気が楽だ。	4.87	1.09	2	6	3.78	5.95
17 ちょっとした好意にも、ありがたいという感謝の気持ちは必要だと思う。	5.45	0.73	3	6	4.71	6.18
18 私はお返しする時、多少の負担(金銭、時間など)は気にしない。	4.35	1.31	1	6	3.04	5.65

注) * は反転項目

表2 心理的負債感尺度の因子分析結果(最尤法プロマクス回転後)

項目	F1	F2	共通性
1 私は友達から世話になったら、友情を保つためにできるだけ早くそのお返しをする。	.68	-.18	.36
3* 私は誰かに借りがあっても、気にならない。	.63	-.07	.35
10 私は人に何かしてもらったら、その人にお返しをすべきだと思う。	.62	.03	.41
13 私はたとえ嫌いな人にでもお返しをする。	.58	.01	.34
7 人におごってもらうと、次は私がおごらなければならないと思う。	.54	.06	.34
11* 私は見知らぬ人から助けてもらった時には、お返しをする必要はないと思う。	.46	-.19	.15
16 私は人に何かをしてもらうより、自分が何かをしてあげの方が気が楽だ。	.46	-.05	.19
9 わざわざ人が私を助けてくれた時には、その人に単なるお返し以上のことをしなければならぬと思う。	.44	.16	.30
14 私は人に何か物をもらうと、お返しのことが気になる。	-.13	.97	.82
6 私は普通お返しができないと思うときは、その人の世話にはならない。	-.01	.55	.30
4 私は、自分から人に助けを求めるとその人に頭が上がらなくなると思う。	.14	.51	.36
15* 私は人から何かしてもらっても、必ずしもお返しをする必要はないと思う。	.34	.44	.48
説明分散	2.64	1.81	
累積比率	.22	.37	

注1) * は反転項目

注2) 因子負荷量が .40 以上のものを太字で表記した。

注3) 因子間相関は .56 であった。

内藤・原田(2016)や泉井・中道・中澤(2007)の報告では2因子解が適当とされていた。本研究でも2因子解が適当であると判断し、最尤法プロマクス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40以上を示した項目を解釈に用い、どの因子にも十分な因子負荷量を示さなかった項目5, 8, 12, 18は今後の分析から除外した。因子負荷量を表2に示す。各因子を構成する項目内容について、2因子解が報告された鷺巣・内藤・原田(2016)とは異なる因子に寄与している項目が数多くあった。新たな因子を発見したと考え、因子の命名を行った。第1因子は「私は友達から世話になったら、友情を保つためにできるだけ早くそのお返しをする」など、お返しについての考え方や意識に関する項目が多く含まれていたことから、『返礼意識』と命名した。第2因子は「私は人に何か物をもらうと、お返しのことが気になる」など、お返しを負担に思うことに関する項目が多く含まれていたことから、『返礼負債感』と命名した。クロンバックの α 係数は第1因子で.76, 第2因子で.76であり、許容範囲内の内的一貫性が得られた。

(2)特性感謝尺度 McCullough, Emmons & Tsang(2002): 相川・矢田・吉野(2013)と同様の1因子構造になるか確かめるため、確認的因子分析を行った。反転項目である項目3, 6は得点の反転処理を行ってから分析に用いた。特性感謝尺度の基本統計量を表3に示す。1つの因子からそれぞれの項目が影響を受けると仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(9) = 52.62, p < .001, CFI = .824, RMSEA = .208, SRMR = .086$ であった。モデルの適合度が不十分であったため、 $M + SD$ が評定値の上限である6を上回った項目1, 2, 3について検討を行った。各項目の得点分布と項目内容を考慮し、項目1は天井効果が見られると考え今後の分析から除外した。項目2, 3は除外せずに分析を進めた。

項目1を除外し再度分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(5) = 7.30, p = .199, CFI = .998, RMSEA = .064, SRMR = .046$ であり、最初のモデルよりもデータに適合した結果が得られた。表4に、この最終的なモデルの分析結果を示す。クロンバックの α 係数は.79であり、許容範囲内の内的一貫性が得られた。

表3 特性感謝尺度の基本統計量

項目	平均値	標準偏差	Min	Max	$M - SD$	$M + SD$
1 私の人生には感謝することがたくさんある。	5.33	0.78	3	6	4.55	6.11
2 もしも私が感じた感謝を全て挙げなければならないとするならば、それはとても長いリストになる。	4.96	1.09	2	6	3.87	6.05
3* 私は、世の中の人々がなぜそんなにたくさん感謝をするのかが分からない。	5.05	1.00	1	6	4.05	6.06
4 私は様々な人々に感謝をしている。	4.96	1.02	1	6	3.94	5.97
5 歳を取るにつれて、私は自分の人生に関わった人々や出来事、状況に、以前よりも感謝できる。	4.98	0.99	2	6	4.00	5.97
6* 私がある事柄や誰かに感謝を感じるのに、とても長い時間がかかる。	4.28	1.16	1	6	3.13	5.43

注) * は反転項目

表4 特性感謝尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	共通性
4 私は様々な人々に感謝をしている。	.83	.69
5 歳を取るにつれて、私は自分の人生に関わった人々や出来事、状況に、以前よりも感謝できる。	.70	.49
3* 私は、世の中の人々がなぜそんなにたくさん感謝をするのかが分からない。	.66	.43
2 もしも私が感じた感謝を全て挙げなければならないとするならば、それはとても長いリストになる。	.63	.40
6* 私があつる事柄や誰かに感謝を感じるのに、とても長い時間がかかる。	.56	.32

注1) * は反転項目

注2) 因子負荷量が .40 以上のものを太字で表記した。

注3) $\chi^2(5) = 7.30, p = .199, CFI = .998, RMSEA = .064, SRMR = .046$

表5 援助成果志向性尺度の基本統計量

項目	平均値	標準偏差	Min	Max	M-SD	M+SD
1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	4.37	0.62	2	5	3.75	4.98
2 もし人から自分の行為を感謝されたら、私は喜びを感じる。	4.51	0.74	1	5	3.77	5.24
3 人に何かしてあげると、私は自分が人の役に立てたと感じる。	4.33	0.80	2	5	3.53	5.13
4 私は人に喜ばれると嬉しい。	4.71	0.54	2	5	4.17	5.26
5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	4.08	0.92	1	5	3.16	5.00
6 私は、たとえ知らない人同士でも、思いやり行動を介した人間的ふれ合いは望めると思う。	4.38	0.66	2	5	3.72	5.04
7 人から感謝されると、私は奮起する。	4.04	0.94	1	5	3.10	4.99
8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	4.23	0.88	1	5	3.35	5.11
9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	3.48	1.12	1	5	2.36	4.61
10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	4.04	0.83	1	5	3.21	4.88
11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	4.46	0.71	2	5	3.75	5.17
12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	3.53	1.07	1	5	2.46	4.59
13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	3.61	1.08	1	5	2.53	4.68
14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	4.11	0.92	1	5	3.18	5.03
15 私は人に喜ばれるのが好きだ。	4.63	0.60	2	5	4.02	5.23
16 私はちょっとした親切でも互いに心が通じ合うことがあると思う。	4.35	0.64	3	5	3.71	4.99
17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	3.92	0.90	1	5	3.02	4.82
18 私は人に何かをしてもらうより、人に何かをしてあげることの方が嬉しい。	4.00	0.90	2	5	3.10	4.90

(3) 援助成果志向性尺度 妹尾・高木(2011)は高齢者を対象とする調査によって本尺度を作成した。本調査は対象が大学生であったため、因子構造が異なる可能性が考えられた。そこで今後の分析に用いる変数を抽出することを目的に、探索的因子分析を行った。援助成果志向性尺度の基本統計量を表5に示す。表5より、 $M + SD$ が評定値の上限である5を上回った項目2, 3, 4, 5, 6, 8, 11, 14, 15について検討を行った。各項目の得点分布と項目内容を考慮し、項目2, 4, 16は今後の分析から除外した。項目3, 5, 6, 8, 11, 14については除外せずに分析を進めた。

主成分分析によるスクリープロットは2因子解を示唆し、平行分析は2因子解を示唆し

た。妹尾・高木(2011)の報告で2因子解が適当とされていたため本研究でも2因子解を適当と判断し、最尤法プロマクス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40以上を示した項目を解釈に用いることとし、どの因子にも十分な因子負荷量を示さなかった項目6は今後の分析から除外した。因子負荷量を表6に示す。各因子を構成する項目内容について妹尾・高木(2011)と異なる因子に寄与している項目が多くあった。新たな因子を発見したと考え、因子の命名を行った。第1因子は「援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる」など、援助に向かう気持ちや援助の目標に関する項目が多く含まれていたことから、『援助意欲』と命名した。第2因子は「人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある」など、援助を通して得られる気持ちに関する項目が多く含まれていたことから、『援助充足感』と命名した。クロンバックの α 係数は第1因子で.81、第2因子で.84であり、十分な内的一貫性が得られた。

表6 援助成果志向性尺度の因子分析結果(最尤法プロマクス回転後)

項目	F1	F2	共通性
12 援助をすると、私の中に相手の幸福・安寧のための新たな目標が生まれる。	.85	-.06	.67
9 援助をすると、私自身を高める目標が生まれる。	.72	.08	.60
13 私は人を助けると、人や地域にもっと貢献しようという気持ちになる。	.71	.11	.62
14 援助で関わった人から教えられ、私自身の勉強になることがある。	.57	-.07	.27
17 私は感謝やお礼がなくても相手のためになっていると実感できる。	.42	-.06	.15
10 人への好意や援助は、私の生活の中で重要な行動である。	.41	.29	.40
18 私は人に何かをしてもらうより、人に何かをしてあげることが嬉しい。	.40	-.09	.12
1 人への好意や援助から、私は喜びや感動を経験することがある。	-.30	.85	.48
8 人に何かしてあげると、私は気持ちの充足感が得られる。	.09	.78	.70
3 人に何かしてあげると、私は自分が人の役に立てたと感じる。	.03	.69	.50
7 人から感謝されると、私は奮起する。	.27	.55	.57
11 私は、相手への好意や援助は良好な人間関係に寄与すると思う。	.17	.48	.37
5 人に何かしてあげると思いやり意識が身につくと思う。	.28	.43	.41
説明分散	2.86	2.63	
累積比率	.22	.42	

注1) 因子負荷量が.40以上のものを太字で表記した。

注2) 因子間相関は.65であった。

表7 友人間ソーシャルサポート互恵性尺度の基本統計量

項目	平均値	標準偏差	Min	Max	M-SD	M+SD
1 お互いに、落ち込んでいるときにはなぐさめあっている。	3.84	0.96	1	5	2.88	4.80
2 お互いに、人間関係で悩んでいるときに相談し合っている。	3.81	1.06	1	5	2.75	4.87
3 自分が悩んでいることを人に相談したり、人から相談されたりする。	3.88	1.01	1	5	2.87	4.88
4 お互いに、悩んでいるとき、冗談を言ったり一緒に何かをやったりして気をまぎれさせ合っている。	4.09	0.94	1	5	3.15	5.02
5 人が自分に何かをくれたとき、今度は私もあげるようにしている。	4.29	0.69	2	5	3.60	4.99
6 もし人が自分に何かしてくれたら、今度は自分もするようにしている。	4.33	0.62	2	5	3.71	4.95

(4) 友人間ソーシャルサポート互恵性尺度 浅野・飯沼・大木(2016)が作成した本尺度を用いて行われた研究は少なく、知見が不十分であると考えられた。そこで以後の分析に用いる変数を抽出することを目的に、探索的因子分析を行った。友人間ソーシャルサポート尺度の基本統計量を表7に示す。表7より、 $M+SD$ が評定値の上限である5を上回った項目4について検討を行った。分布に大きな偏りは見られないと判断し、除外せずに今後の分析を進めた。

主成分分析によるスクリープロットは2因子解を示唆し、平行分析は2因子解を示唆した。浅野・飯沼・大木(2016)の報告では1因子解が適当とされていた。ところで、浅野・飯沼・大木(2016)が作成した本尺度は、これまで互恵性を測定する尺度には認知的な側面が含まれておらず、互恵性への認知を含めて友人間のソーシャルサポート互恵性を測定することを目的に作成された。そのため本研究で得られた2因子解を示唆する結果は、互恵性への認知に関する項目と、実際に受容・提供したソーシャルサポートに関する項目の、それぞれ異なった性質を表していると考えられた。以上より2因子解を適当と判断し、最尤法バリマクス回転による因子分析を行った。因子負荷量が.40以上を示した項目を解釈に用いた。因子分析で得られた因子負荷量を表8に示す。浅野・飯沼・大木(2016)と異なる結果が得られたため、新たに因子の命名を行った。第1因子は「お互いに、人間関係で悩んでいるときに相談し合っている」など、日常的な場面でのサポートに関する項目が多く含まれていたことから、『相互サポート』と命名した。第2因子は「人が自分に何かをくれたとき、今度は私もあげるようにしている」というサポートを受けた際の意識に関する項目が含まれていたことから、『サポート意識』と命名した。ただし第2因子は2項目のみで構成されている。第2因子を今後の分析から除外することも検討したが、浅野・飯沼・大木(2016)の本尺度作成の過程を踏まえより多面的に捉えられるよう、第2因子を独立した因子と認め今後の分析を進めることとした。クロンバックの α 係数は第1因子で.82, 第2因子で.84であり、十分な内的一貫性が得られた。

表8 友人間ソーシャルサポート互恵性尺度の因子分析結果(最尤法バリマクス回転後)

項目	F1	F2	共通性
3 自分が悩んでいることを人に相談したり、人から相談されたりする。	.86	.04	.74
2 お互いに、人間関係で悩んでいるときに相談し合っている。	.76	.14	.60
1 お互いに、落ち込んでいるときにはなぐさめあっている。	.72	.21	.56
4 お互いに、悩んでいるとき、冗談を言ったり一緒に何かをやったりして気をまぎれさせ合っている。	.53	.29	.37
6 もし人が自分に何かしてくれたら、今度は自分もするようになっている。	.11	.94	.90
5 人が自分に何かをくれたとき、今度は私もあげるようになっている。	.11	.77	.60
説明分散	2.14	1.63	
累積比率	.36	.63	

注) 因子負荷量が.40以上のものを太字で表記した。

表9 多次元共感性尺度の基本統計量

項目	平均値	標準偏差	Min	Max	M-SD	M+SD
1 悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	4.15	0.91	1	5	3.24	5.06
2* 悩んでいる友達がいるても、その悩みを分かち合うことができない。	3.52	1.07	1	5	2.45	4.58
3 人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	4.13	0.92	1	5	3.20	5.05
4* 他人が失敗しても同情することはない。	3.89	0.85	1	5	3.04	4.75
5 周りの人が困っていたら、その人の問題が早く解決するといいなあと思う。	4.28	0.74	1	5	3.54	5.01
6 自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのか分かってしようとする。	4.10	0.80	2	5	3.29	4.90
7 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	3.97	0.81	2	5	3.16	4.78
8 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのか考えながら話を聞く。	4.25	0.70	2	5	3.55	4.95
9 常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。	3.96	0.76	2	5	3.21	4.72
10* 相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。	3.57	0.98	1	5	2.59	4.56

注) * は反転項目

表10 多次元共感性尺度の確認的因子分析結果

項目	F1	F2	共通性
3 人が頑張っているのを見たり聞いたりすると、自分には関係なくても応援したくなる。	.74		.54
4* 他人が失敗しても同情することはない。	.72		.52
5 周りの人が困っていたら、その人の問題が早く解決するといいなあと思う。	.70		.48
1 悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。	.59		.35
2* 悩んでいる友達がいるても、その悩みを分かち合うことができない。	.50		.25
6 自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのか分かってしようとする。		.77	.60
9 常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。		.71	.51
8 人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのか考えながら話を聞く。		.67	.45
7 人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。		.64	.41
10* 相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。		.36	.13

注1) * は反転項目

注2) 因子負荷量が .40 以上のものを太字で表記した。

注3) 因子間相関は .57 であった。

注4) $\chi^2(34) = 60.52, p = .003, CFI = .919, RMSEA = .083, SRMR = .069$

(5) 多次元的共感性尺度 鈴木・木野(2008)と同様の因子構造になるか確かめるため、確認的因子分析を行った。反転項目である項目 2, 4, 10 は得点の反転処理を行ってから分析に用いた。多次元的共感性尺度の基本統計量を表 9 に示す。本調査では、鈴木・木野(2008)が作成した尺度のうち「他者指向的反応」と「視点取得」の 2 つの因子に関する項目のみ

を用いた。そのため2つの因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ、適合度指標は $\chi^2(34) = 60.52, p = .003, CFI = .919, RMSEA = .083, SRMR = .069$ であり、許容範囲内の値が得られた(表 10)。鈴木・木野(2008)と同様、本研究でも第1因子を『他者指向的反応』、第2因子を『視点取得』と解釈し以後の分析に用いた。クロンバックの α 係数は第1因子で .77、第2因子で .75 であり、許容範囲内の内的一貫性が得られた。

表 11 各下位尺度得点の基本統計量

		N	平均値	中央値	標準偏差	分散	最小値	最大値
心理的負債感	(6件法)							
返礼意識	(8項目)	112	35.79	36.0	5.67	32.15	18.0	48.0
返礼負債感	(4項目)	112	13.60	13.5	4.26	18.13	4.0	21.0
特性感謝	(6件法)							
	(5項目)	112	24.23	25.0	3.88	15.04	11.0	30.0
援助成果志向性	(5件法)							
援助意欲	(7項目)	112	26.69	27.0	4.67	21.77	13.0	35.0
援助充足感	(6項目)	112	25.52	26.0	3.66	13.42	16.0	30.0
友人間SS互恵性	(5件法)							
相互サポート	(4項目)	112	15.62	16.0	3.21	10.27	4.0	20.0
サポート意識	(2項目)	112	8.63	8.0	1.22	1.50	4.0	10.0
多次元的共感性尺度	(5件法)							
他者指向的反応	(5項目)	112	19.96	20.0	3.27	10.70	5.0	25.0
視点取得	(4項目)	112	16.29	16.0	2.42	5.86	10.0	20.0

心理的負債感と特性感謝の関連

各尺度の項目得点の合計点を尺度得点とし、各下位尺度の尺度得点を算出した。各下位尺度の基本統計量を表 11 に示す。はじめに、本研究の第1の目的である心理的負債感と特性感謝の関連について検討を行った。心理的負債感の2つの下位尺度の合計得点である「心理的負債感得点」と、特性感謝の尺度得点である「特性感謝得点」の相関係数を求めたところ、 $r = .33, p < .001$ であり、有意な弱い正の相関が見られた。

続いて、個人特性としての感謝が心理的負債感の感じやすさに影響するのか検討することを目的に t 検定を行った。特性感謝得点は平均値を基準に高群と低群に分け、それらを独立変数、心理的負債感の得点を従属変数とする、対応のない t 検定を行った。各群の基本統計量を表 12 に示す。 t 検定の結果、特性感謝得点の高低における心理的負債感得点の差は有意であった($t(110) = 2.13, p = .035, d = 0.40$, 検出力($1-\beta$) = 0.56, 両側検定)。

表 12 特性感謝得点の高低における心理的負債感得点

		N	平均値	中央値	標準偏差	最小値	最大値
特性感謝	低群	55	47.65	48.00	8.29	25.00	61.00
特性感謝	高群	57	51.05	51.00	8.58	33.00	67.00

表 13 各下位尺度間の相関係数

	返礼意識	返礼負債感	特性感謝	援助意欲	援助充足感	相互サポート	サポート意識	他者指向的反応
心理的負債感								
返礼意識								
返礼負債感	.481 **							
特性感謝								
	.464 **	.037						
援助成果志向性								
援助意欲	.589 **	.286 **	.336 **					
援助充足感	.434 **	.115	.369 **	.636 **				
友人間SS互恵性								
相互サポート	.229 *	-.077	.353 **	.289 *	.345 **			
サポート意識	.644 **	.218 *	.523 **	.415 *	.385 **	.296 **		
多次元共感性尺度								
他者指向的反応	.416 **	.086	.568 **	.533 *	.489 **	.511 **	.442 **	
視点取得	.324 **	.029	.416 **	.209 *	.235 *	.191 *	.410 **	.432 **

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

心理的負債感を予測する変数

第2の目的である、「心理的負債感」と「特性感謝」「援助成果志向性」「友人間ソーシャルサポート互恵性」「共感性」の各下位尺度の関連を検討するため、はじめに各下位尺度間の相関係数を算出した(表13)。続いて、各変数が心理的負債感の2つの下位尺度とそれぞれどのような関連があるのか検討するために、心理的負債感の下位尺度である「返礼意識」「返礼負債感」それぞれを目的変数、「特性感謝」「援助成果志向性」「共感性」の各下位尺度それぞれを説明変数とする重回帰分析を行った。変数の投入は同時に行った。重回帰分析の結果を表14に示す。

返礼意識 「返礼意識」を目的変数とする重回帰分析の結果、決定係数は有意であった($R^2 = .55$, $F(7, 104) = 18.49$, $p < .01$, $adjusted R^2 = .52$)。標準化偏回帰係数は「援助意欲」「サポート意識」であった(援助意欲: $\beta = .41$, $t(104) = 4.42$, $p < .001$, サポート意識: $\beta = .43$, $t(104) = 5.12$, $p < .001$)。許容度は.44~.73の間にあり、多重共線性の問題はないと判断した。

表 14 重回帰分析結果

目的変数	説明変数	標準化偏回帰係数	95%信頼区間	t値	許容度
返礼意識	特性感謝	.14	-.03 ~ .31	1.60	.57
	援助意欲	.40 **	.22 ~ .59	4.42	.51
	援助充足感	.00	-.18 ~ .17	-0.05	.54
	相互サポート	-.04	-.19 ~ .12	-0.48	.72
	サポート意識	.43 **	.26 ~ .59	5.13	.62
	他者指向的反応	-.06	-.26 ~ .13	-0.66	.44
	視点取得	.04	-.11 ~ .19	0.55	.73
$R^2 = .55$ **					
返礼負債感	特性感謝	-.08	-.32 ~ .15	-0.70	.57
	援助意欲	.33 *	.08 ~ .58	2.59	.51
	援助充足感	-.08	-.33 ~ .16	-0.68	.54
	相互サポート	-.18	-.39 ~ .04	-1.64	.72
	サポート意識	.23 +	.00 ~ .45	1.95	.62
	他者指向的反応	.01	-.26 ~ .28	0.08	.44
	視点取得	-.05	-.26 ~ .16	-0.46	.73
$R^2 = .14$ *					

注)** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

返礼負債感 「返礼負債感」を目的変数とする重回帰分析の結果、決定係数は有意であった($R^2 = .14$, $F(7, 104) = 2.50$, $p = .021$, $adjusted R^2 = .09$)。標準化偏回帰係数は「援助意欲」で有意であり、「サポート意識」で有意傾向であった(援助意欲: $\beta = .33$, $t(104) = 2.60$, $p = .011$, サポート意識: $\beta = .23$, $t(104) = 1.95$, $p = .054$)。許容度は .44~.73 の間にあり、多重共線性の問題はないと判断した。

考察

本研究は、心理的負債感と感謝は共起するという前提のもと、心理的負債感に影響を及ぼす個人特性について検討することが目的であった。相関分析と t 検定の結果、心理的負債感と特性感謝には正の相関が見られ、心理的負債感が高いと特性感謝も高い傾向にあることが明らかとなった。これは吉野・相川(2020)などで示された、負債感と感謝は共起するという前提を支持する結果である。また、心理的負債感を目的変数とする重回帰分析の結果、援助成果志向性尺度の下位尺度で、援助をすることに喜びを感じ援助を肯定的に捉える特性である「援助意欲」と、友人間ソーシャルサポート互惠性尺度の下位尺度で、他者から何かしてもらったら自分もお返ししようとする意識の高さを表す「サポート意識」

の2つの下位尺度が心理的負債感に影響を与えることが明らかとなった。この結果は、援助成果志向性が心理的負債感と関連をもつという妹尾・高木(2011)の結果を一部支持し、心理的負債感が対人関係を促進する要因と関係する可能性を示すものである。

特性感謝と心理的負債感

Mathew & Shock(2013)と同様の特性感謝尺度を用いても感謝と負債感には正の相関が見られたことから、感謝と負債感の関係には文化差が影響する可能性が高いと考えられる。感謝感情と負債感情を同時に経験するという特性が日本文化特有のものである可能性は、池田(2017)が示した、日本人は恩を受けて感じる心苦しさを表現する「すみません」と、純粋な感謝表現の「ありがとう」をしばしば併用するという事実からも理解することができる。池田(2017)によれば、この「すみません」という表現は相手への恐縮の念を表明しており、それが対人関係の維持と形成に寄与している。また一言・新谷・松見(2008)は、日本人大学生はアメリカ人大学生と比べ、被援助によって自身が得られた利益よりも、援助者が負ったコストに目を向けやすいことを明らかにしている。Mathew & Shock(2013)が感謝と負債感に負の相関があることを示したように、欧米においては感謝を喚起させることが負債感を低減させる要因として有効であると考えられている。例えば Emmons & McCullough(2003)は、感謝を想起し筆記するという介入方法がポジティブ気分を高めることを明らかにしている。ところが Emmons & McCullough(2003)を追試した相川・矢田・吉野(2013)では同様の効果が得られていないことや、日本において感謝介入がうまくいかないことがいくつかの研究で指摘されている(e.g., 岩崎・五十嵐, 2016)。以上より、日本人にとって感謝と負債感の切り離すことのできない関係にあり、負債感を生じさせずに感謝だけを生じさせようとすることや、感謝を低減させずに負債感だけを低減させようとするような介入は有効でない可能性が考えられる。今後負債感を低減させるための介入方法を考えるには、感謝と負債感が共起する可能性を考慮し検討することが必要であるだろう。

しかしながら田中(2011)は、被災地での「感謝を伝え合う」活動が心理的負債感を低減させる実感を伴ったものであったと報告しており、ここでは感謝の喚起と負債感の低減が同時に生じている。この現象について Greenberg(1980)の心理的負債のモデルから考えると、被災者が援助を受けたことで抱えきれなくなった負債感を、「感謝を伝える」という形の返報行動として表出したことで、利益とコストに対する衡平性が保たれ、負債感が低減したと考えることができる。そもそも相川・吉森(1995)が定義した心理的負債感とは、負債感の感じやすさや、負債感をどの程度個人内に留めておくことができるか、またどの程度負債感を低減したいと感じるかといった側面も含まれた概念である。ここから、心理的負債感が持つネガティブな側面を低減させるには、負債感を生じさせないことを目指すのは適切でなく、むしろ負債感が生じた後にどう行動するかが重要であると考えられる。妹尾・高木(2004)は高齢者を対象にした調査で、ある人の行う援助行動が多様であるほど被援助行動も多様であり、援助や被援助に積極的に動機づけられることを明らかにしている。心

理的負債感は返報行動を動機づけるために生じるものであり、援助と被援助の好循環を促す側面も持つ感情であると考えられる。そのため、被援助時にその後の返報行動を多様にイメージできると、援助を受けることへの抵抗感やネガティブ感情である負債感が低減されるかもしれない。

心理的負債感と各変数の関係

「援助成果志向性」の下位尺度である「援助意欲」と「ソーシャルサポート互恵性」の下位尺度である「サポート意識」という、他者と関わろうとする特性と心理的負債感の各下位尺度との間に正の関連が見られ、援助への意欲や、サポートをしようという意識が心理的負債感に影響を与えることが示唆された。援助への積極性が高いとお返しへの負担感が高まるというのは、一見すると矛盾した関係に見える。ところが、鷲巢・内藤・原田(2016)は心理的負債感が対人的志向性を通じて「人生全般にわたるポジティブな心理的機能」である「心理的 well-being」を向上させることを明らかにしている。また感謝と負債感が共起することを前提として、心理的負債感は返報行動を動機づけるものである(相川・吉森, 1995)と捉えると、心理的負債感是对人関係の中で必然的に生じうるものであり、円滑な人間関係を営むために必要であり、必ずしもネガティブで不適応的な感情ではないと考えられる。心理的負債感が援助の好循環につながる健康的な要因として機能するためにどのような介入が必要であるのか、今後より詳細に検討していく必要があるだろう。

援助成果志向性 援助成果志向性の下位尺度である「援助意欲」は心理的負債感と正の関連を示したが、「援助充足感」は心理的負債感と関連が見られなかった。援助に意欲的であることが返礼を意識させ、それが時に負担に感じることもあると考えられる。これは妹尾・高木(2011)の結果を一部支持し、高齢者だけでなく大学生においても、援助成果志向性が心理的負債感と正の関連を持つということが部分的に明らかになった。池田(2017)は感謝に伴うすまなさ感情が他者との関係形成や維持につながると述べているが、心理的負債感が“感謝とすまなさ感情を伴う返報への義務感”であると捉えると、「援助意欲」という援助への肯定的な意識が「心理的負債感」という返報行動を動機づけたと解釈することができる。心理的負債感是对人場面において、他者との関係を促進させる要因になり得ると考えられる。しかしながら、過去の自身の援助に満足している経験は負債感に影響しないと考えられる。これは妹尾・高木(2011)と異なる結果である。日常的に不自由なく返報行動を行える機会がある青年においては、過去の援助経験が援助の好循環を規定する要因とはならないのかもしれない。

共感性 共感性の下位尺度である「他者志向性」と「視点取得」どちらの下位尺度についても、心理的負債感との関連は見られなかった。妹尾・高木(2011)は、心理的負債感と対人的志向性はどちらも“他者の心情を慮ることで生じる経験である”ことからその関係性を考察していた。本研究からはこの考察を支持することはできなかった。心理的負債感に他者の心情を慮る性質は関係せず、援助してくれた相手の心情を思って、純粋な善意か

らお返しをしたい気持ちを抱くわけではない可能性が考えられる。一言・新谷・松見(2008)は、日本人は被援助時に「相手に迷惑をかけたのではないか」と感じ、それにより「今後相手との関係が悪化するのではないか」という懸念や不安感が生じることを指摘している。Greenberg(1980)が負債感(負感)は利益とコストに規定されることを示しているように、「相手のためを思って返礼が意識される」というわけではないと考えられる。あくまで自分の中の不安や不快感を低減させるためや、「お返しするのが礼儀だから」といった社会規範の影響、「今度も相手と関係を持続するために必要だから」といった義務感から「お返しをするべき」という思いや負債感が生じ、返報に動機づけられる可能性が高いと考える。

友人間ソーシャルサポート互恵性 友人間ソーシャルサポート互恵性の下位尺度である「サポート意識」は心理的負債感と正の関連を示したが、「相互サポート」と心理的負債感との関連は見られなかった。「サポート意識」が心理的負債感と正の関連があるという結果は、相互的であろうとする意識があるほど負債感が高まると解釈でき、負債感が生じるメカニズムを直接的に表すような結果と捉えられる。吉野・相川(2015)は、相手の援助に対して「すまない」という感謝を抱きやすい人は、手段的サポートの知覚がされやすいことを明らかにしている。この知見を感謝と負債感が共起するという前提に沿って考えると、負債感が生じると、それに伴って申し訳ないという気持ちも生じやすくなると思われる。その状態では目に見える形の援助(手段的サポート)に目が向きやすいと考えられ、情緒的なサポートには意識が向きにくい。その結果、本研究では目に見える援助のやりとりである「サポート意識」との間に関連があったが、日常的なやりとりに近く、一見援助として認識されない「相互サポート」と心理的負債感の間には関連がなかったと考えられる。ソーシャルサポートは、実際どの程度のサポートを得られているか測定することも必要だが、いかにそれを本人が知覚しているか検討することも重要であるとされる(浅野・飯沼・大木, 2016)。今回の質問項目では、そもそも友人と相談し合うことを互恵的サポートであると認識できていたかどうか曖昧なため、関連が見られなかった可能性がある。

「互恵的である」ということは、本人が「援助を受けた」と知覚していない状況であるとも考えられ、そもそもサポートが援助として意識されなければお返しについて考えることも、ありがたい気持ちを感じることもない。そのため互恵性は直接的には負債感に影響を与えないのかもしれない。さらに「互恵的である」といっても、物品などでの具体的なサポートと、情緒的なサポートとでは、サポートを受け取った際に生じる感情の質も異なってくると思われる。今後はサポートを知覚した際に感情がどのように変化するか、また被援助者に援助と悟られないようなサポートをした際にどのような反応が起こるかなど、互恵的であることが日常場面でどう捉えられるのか、互恵性が対人場面にどう影響を与えるのか等を考慮していくことが必要であるだろう。

各下位尺度について

本研究では一部先行研究と異なる因子構造が発見され、各尺度に関して新たな知見を示

した。心理的負債感尺度は、作成した相川・吉森(1995)において1因子構造とされていたが、本研究では2因子構造を適当とした。本研究同様2因子構造であるとする研究も存在している(e.g., 鷺巣・内藤・原田, 2016)。本研究は心理的負債感尺度は2因子として用いることが妥当であるという知見を支持するものである。ただし、下位尺度内の項目に関しては鷺巣・内藤・原田(2016)と一致しないものもあった。心理的負債感尺度の因子構造が安定しない理由として、本研究ではサンプルが偏っていた問題点が挙げられるが、心理的負債感そのものの定義が非常に広く曖昧であることも考えられる。相川・吉森(1995)は、「心理的負債感の感じやすさ」「心理的負債感への耐性」「心理的負債感の低減欲求」の3側面を踏まえて尺度を作成しているが、心理的負債感が学習によって緩やかに変化しうる特性であることも指摘している。また心理的負債感とは状況や援助者の属性によっても感じる程度は異なることが予想される。個人内要因と個人間要因が混合したまま測定してしまった可能性が高く、対象者によって結果が異なってしまったのかもしれない。今後、状況等の要因にも考慮し検討していく必要があるだろう。

友人間ソーシャルサポート互惠性尺度は、作成した浅野・飯沼・大木(2016)では1因子構造とされていたが、本研究では2因子構造を適当とした。他者の研究において2因子構造で使用されたという報告を見つけることはできなかったが、本研究で得られた因子構造は、実際にサポートを行っている内容のものと、サポートへの意識に関する内容のものとで明確に分かれていた。ソーシャルサポートは「社会的包絡」「知覚されたサポート」「実行サポート」の3つの次元に分類されることが知られており(岡安・嶋田・坂野, 1993)、ソーシャルサポートの多様な側面が尺度内に反映された可能性も考えられる。ソーシャルサポートの多様な側面を考慮し項目内容を再検討するなど、知見を積み重ねる必要がある。

今後の課題

1つ目に、サンプルの偏りの問題を挙げる。本調査では多くの尺度項目で天井効果が疑われた。これは対象者の属性が影響した可能性がある。調査協力者の多くは教師や対人援助職を目指す人であったことが予想されるが、日常的に他者と交流する機会が多く、他者を援助することを目標に学習している人々にとって、感謝やお返しというのは普段から意識されているものだろう。そのため先行研究と同質のデータが取れず、得点分布が上位に偏ったと考えられる。今後は調査協力者が特定の属性に偏らないような配慮をし、より幅広い対象に調査を行うことが必要であるだろう。

2つ目に、本調査では各下位尺度の妥当性が不十分である可能性が挙げられる。先行研究で示されたものと異なる項目で因子が構成されたものが多く、項目間にはっきりした関係性を見出すことができない因子となってしまった。いくつかの項目が削除されてしまったため、先行研究とは異なる因子構造になっている可能性も否定できない。新たに作成した因子については妥当性の検証ができていないため、項目内容の再検討や、項目数を増やして再調査することなどを通して、尺度の信頼性、妥当性を高める必要があるだろう。

最後に本調査では検討できなかった要因として、感謝や負債感は被援助時に生じる感情であるが、どんな場面で、誰が援助してくれたかといった状況の要因によっても、その感じやすさや程度は異なる。本調査から分かったのはあくまで特性としての感謝と負債感が共起するという可能性であり、全ての場面や個人において感謝と負債感が共起するとは言えない。今後は状況の要因なども踏まえ、感謝と負債感の性質について検討していくことが求められる。感謝と負債感が相互に関連することで生じる対人関係場面での心理状態について、今後も知見を積み重ねていくことが望まれる。

文献

- 相川 充・吉森 護 (1995). 心理的負債感尺度作成の試み 社会心理学研究, *11*, 63-72.
- 相川 充・矢田さゆり・吉野優香 (2013). 感謝を数えることが主観的ウェルビーイングに及ぼす効果についての介入実験 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, *64*, 125-138.
- 浅野更紗・飯沼和希・大木桃代 (2016). 友人間ソーシャルサポート互惠性尺度の作成と妥当性の検討 生活科学研究, *38*, 115-116.
- Emmons, R. A., & McCullough, M. E. (2003). Counting blessings versus burdens: An experimental investigation of gratitude and subjective well-being in daily life *Journal of Personality and Social Psychology*, *84*, 377-389.
- Greenberg, M. S. (1980). A Theory of indebtedness In K. Gergen, M. S. Greenberg, & Willis (Eds.) *Social exchange: Advances in theory and research* (pp. 3-26) Plenum.
- 藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究, *62*, 187-196.
- 福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩衝効果 心理学研究, *68*, 403-409.
- 一言英文・新谷優・松見淳子 (2008). 自己の利益と他者のコストー心理的負債感の日米間比較研究ー 感情心理学研究, *16*, 3-24.
- 池田幸恭 (2017). 感謝に伴うすまなさ感情の検討 和洋女子大学紀要, *57*, 65-74.
- 石野由香里 (2013). 「学生ボランティア」の特異性が地域に対して有する潜在的な機能ーボランティアをする/される関係をズラす効果が地域の場合づくりへ与えた影響 生活學論叢, *23*, 3-16.
- 泉井みずき・中道圭人・中澤 潤 (2007). 大学生の社会的問題解決(4)ー社会的問題解決と心理的負債の関連ー 日本発達心理学会研究第 18 回大会発表論文, 545.
- 泉井みずき・中澤 潤 (2010). 被援助に対する返報ー諸研究の概観と発達研究への展望ー 千葉大学教育学部研究紀要, *58*, 73-77.
- 岩崎眞和・五十嵐透子 (2016). 感謝研究の現状と課題 茨城キリスト教大学紀要, *50*, 211-224.

- Mathew, M. A. & Shock, N. J. (2013). Promoting or preventing thanks: Regulatory focus and its effect on gratitude and indebtedness *Journal of Research in Personality*, *47*, 191-195.
- 松浦 均 (1992). 援助者との関係性が被援助者の返報行動に及ぼす影響 名古屋大學教育學部紀要, *39*, 23-32.
- McCullough, M. E., Emmons, R. A., & Tsang, J. A. (2002). The grateful disposition: a conceptual and empirical topography *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*, 112-127.
- 西川正之 (1979). 援助行動の平等理論的考察 関西大学大学院人間科学, *13*, 75-81.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, *41*, 302-312.
- 妹尾香織・高木 修 (2004). 高齢者の援助行動経験と心理・社会的幸福・安寧感との関連 心理学研究, *75*, 428-434.
- 妹尾香織・高木 修 (2011). 援助・被援助行動の好循環を規定する要因—援助成果志向性が果たす機能の検討— 関西大学社会学部紀要, *42*, 117-130.
- 鈴木有美・木野和代 (2008). 多次元的共感性尺度(MES)の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて— 教育心理学研究, *56*, 487-497.
- 瀧川裕貴 (2009). 互惠性に基づく平等の規範 理論と方法, *24*, 21-39.
- 田中 優 (2004). 三宅島噴火災害における未就学児とその母親が抱えた問題について 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, *5*, 15-24.
- 田中 優 (2011). 非被災地における被災者支援の社会心理学的問題 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, *13*, 79-87.
- 鷺巣菜保子・内藤俊史・原田真有 (2016). 感謝, 心理的負債感が対人的志向性および心理的 well-being に与える影響 感情心理学研究, *24*, 1-11.
- 吉野優香・相川 充 (2018). 感謝感情と負債感情の共起が第三者への向社会的行動に及ぼす影響 筑波大学心理的研究, *55*, 39-48.
- 吉野優香・相川 充 (2020). 特性感謝・統制負債感と制御焦点理論に基づく行動制御モードとの関連の検討 筑波大学心理的研究, *58*, 33-43.
- Watkins, P., Scheer, J., Ovnicek, M., & Kolts, R. (2006). The debt of gratitude: Dissociating gratitude and indebtedness *Cognition & Emotion*, *20*, 217-241.